

第4章 さらに進んだ実践のために —まとめにかえて—

さらに進んだ実践のために、アシスティブ・テクノロジーの導入は、どのように行っていくべきなのでしょうか。この章では、米国の QAIT という指標を紹介します。

QIAT: Quality Indicators for Consideration of Assistive Technology という「高品質なアシスティブ・テクノロジーを考えるための指標」です。大切と思われる部分を抜粋してまとめると、以下のようになります。

161

1. 子どもの障害の種類や程度によらず、全ての子どもについて AT ニーズを検討すること
2. チームで協働して AT ニーズを検討し、その実施や評価においても、きちんと責任を分担すること
3. チームメンバーは AT に関する十分な知識を持つことに加えて、自分たちの知識の範囲を超える AT ニーズについては、自分たちだけで解決するのではなく、外部に知恵を求める体制を作っておくこと
4. ある特定の領域、例えば ADL の向上に限定して AT を使うのではなく、教科、生活面など全ての領域における AT ニーズを検討すること
5. その際には、その子どもと、その子のカリキュラムと IEP のゴールに沿った目標により、かつ、実際の生活場면을意識して情報収集、検討を行うこと
6. 入手可能な AT のみや、自分の知っている AT について検討するのではなく、障害による困難を克服するために必要な、あらゆる AT を視野に入れて検討すること。例えば、Low-tech から High-Tech まで
7. AT ニーズの検討過程や検討結果については、ドキュメントを作成して IEP とともに保存して、進級や進学において等、担当が変わる際には継続されるようにすること
8. AT 使用にあたっては、定量的な指標を設定し、データに基づいた評価によってモニターし、再評価の必要が生ずれば速やかに実施すること
9. 生徒や保護者、スタッフへの説明や研修、機器の管理やメンテナンスなども、AT サービス実施の一部分であること

QIAT より抜粋

第3章に紹介した活用事例などにおいても、現実には、学校に備え付けてある、あるいは

学校で入手可能なデバイスを、試しに使ってみるといったところが多いのではないでしょう。理想的には、上記の指標を満足するような手続きやシステムの構築が期待されます。

A Story

Ron は5年生です。知能は標準より高いのですが、学習障害があります。図と地の関係が捉えられず、視覚走査(visual tracking)に困難があります。このため、Ron の読みのレベルは2年生の水準にとどまっています。Ron は、5年生になってから、通常のワードプロセッサを使ってみましたが、タイプした文字が読めずに、あきらめました。Ron の家族と担任は、Ron は読みに関しては視覚障害とおなじであると合意しました。

この秋、Ron の個別指導計画のチームは、来年に向けて、特別な教育に関する検討を行いました。今年、IDEA97 が執行されるので、去年の個別指導計画とは違った内容になります。新たにできた特別な検討を要する項目である「行動問題」、「代替言語指導」、「点字」、「代替コミュニケーション」、「個別移行計画」には該当しないと合意されました。

続いて、ここが問題の箇所です。個別指導計画には“アシスティブ・テクノロジーは必要ですか”、それとも“ここでは考えなくてもよいですか”、という問いにあたりました。さて、Ron の個別指導計画のチームのメンバーは、困ってしまいます。Ron のおかあさんと6年生の担任は、だれか、アシスティブ・テクノロジーについて説明してください、といました。すると Ron のリソースルーム担当教員が、アシスティブ・テクノロジーとは「個々の障害児者の”特定の課題実行・活動能力”を拡大させたり、保持したり、また改善させるために用いられる、ありとあらゆるアイテムや装備品、システム製品であり、それらは、店頭での市販品であったり、または、それを改造したり、カスタマイズしたりして入手される」ものであり、Ron のような場合には、たとえば、支援のためのさまざまなソフトウェアがついたコンピュータや携帯式のワープロが、それにあたることを説明した。

Ron のおかあさんは、その意味を理解したので、息子の可能性について考えて興奮気味であった。実は、前にあるテレビ番組で、音声入力機能付きのコンピュータを見たことがあったからだ。Ron が使うことを考えたが、学校がそんなモノを買ってくれるのかどうか疑問だったことを思い出した。このチームの何人かは、この機械について、どこかで聞いたことはあったが、だれも詳しい人はいなかった。

個別指導計画のミーティングは、これで終わってしまった。

この例は、先に紹介したQ I A Tの紹介の中で、示している不十分なアシスティブ・テクノロジー検討例です。ここに登場する Ron という子どもの個別教育計画の立案の様子です。米国では、個別障害児教育法（IDEA97）以来、IEP のチームが、その子のアシスティブ・テクノロジーについてのニーズを検討することが義務付けられていますが、現在でも十分に自信を持ってこれを行っている学校は数割に止まっているようです。この分野では先進国のアメリカですが、まだまだ現実、厳しいようです。内容は、滑稽とも言えますが、思わず、同感する方も多いのではないのでしょうか。さて、ここで、QIAT のリストを思い出して、考えてみましょう。

「実はこの学区の QIAT: Quality Indicators for Consideration of Assistive Technology が届く前に、この個別指導計画立案のミーティングが終わってしまったのであった。そこで、さっそくコピーを配り、再度、そこにある七つのアイテムを検討することにした。

QIAT の第一は「個別指導計画立案チームは、アシスティブ・テクノロジーに関する決定をするにあたって、保護者・当事者に対して説明責任がとれるだけの知識と技能をもつこと。」であった。これを読んだチームメンバーは、すぐに、きちんとした説明責任による決定をする前に、もっと勉強すべきであったと気づいた。そこで、音声入力機能のコンピュータに詳しい人にコンタクトを取ることと、それを操作するためには、どのような技能が必要かを調べることにした。

QIAT には、ほかに「アシスティブ・テクノロジーの機能は、ハイテクからノンテクまで、またさまざまなものがあり、それらを十分に検討、あるいは試してみること。」であった。チームメンバーは、これを読んで、Ron がこれまで、通常のワープロしか、試しておらず、限定的であったことを反省した。リソースルームの担当者は、そういえば学習障害の場合に使われるソフトウェアには、Ron に試させようとは思ってもみなかったものが、多くあることを思い出した。

・(中略)・・・

最終的に個別指導計画には、アシスティブ・テクノロジーのアセスメントを実際に行うことを明記することにした。具体的な実施計画を決めて、二ヵ月後において、もし、アシスティブ・テクノロジーが必要であれば、Ron の個別指導計画に書き込むことを確認した。」

いかがでしょうか。QIAT では、この他に以下のような指標を提案しています。

1. アシスティブ・テクノロジーのニーズのアセスメントにおける指標
2. IEPのためのアシスティブ・テクノロジーの書類作りにおける指標
3. アシスティブ・テクノロジーの適用・実施における指標
4. アシスティブ・テクノロジーの効果についての評価における指標
5. 個別の移行計画におけるアシスティブ・テクノロジーにおける指標
6. 教育委員会等におけるアシスティブ・テクノロジーの施策と予算における指標

164

これらは、本ケースブックを作成する元になっている研究「障害の重度化と多様化に対応するアシスティブ・テクノロジーの活用と評価に関する研究（平成 21 年～平成 22 年度）」研究成果報告書の中に日本語訳を掲載しています。QIAT 並びに SETT の資料の翻訳にあたっては QIAT コンソーシアムの先導者であり、SETT フレームワークの開発者である Joy Zabala 博士（現 CAST: Center for Applied Special Technology の技術支援部長）よりご快諾を頂いています。ここに感謝申し上げます。

さらに、もう一つのツールを紹介しておきたいと思います。それは、個別教育計画（IEP）において、アシスティブ・テクノロジーの選定や導入の内容を決定するためのツールです。SETT フレームワーク（Zabara, 1993; 2002 など）です。米国で開発されたツールですが、これを日本語で利用できるようにした例（大杉, 2009）があります。SETT は、Student-Environment-Task-Tool の頭文字をとったもので、障害の補償のみならず、その人を行うべき活動や、それを取り巻く環境や背景にある因子を、一つの系として、チームで、アシスティブ・テクノロジーを導入して行こうとするものであり、新学習指導要領にある ICF の考え方に重なる部分があると思われます。

なお、以下は、報告書やケースブックで参考にした文献などです。

- (1) 全国特殊教育学校長会（2005）. 盲・聾・養護学校における「個別の教育支援計画」—平成 16 年度文部科学省委嘱「盲・聾・養護学校における『個別の教育支援計画』に関する調査研究事業」（報告書）. ジアース教育新社
- (2) e-AT 利用促進協会（2003）. 詳解 福祉情報技術〈1〉障害とテクノロジー編—福

- 社とテクノロジーの共存をめざして.ローカス
- (3) e - AT 利用促進協会 (2003) .詳解 福祉情報技術 〈2〉生活を支援する技術編—福祉とテクノロジーの共存をめざして.ローカス
 - (4) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 (2008) .季刊 特別支援教育 NEXT67 NO.29.東洋館出版社
 - (5) 山岡修・内藤孝子・井上育世 (2008) .ビジュアル版 LD, ADHD, 高機能自閉症等の発達障害向けの教材・教具の実証研究報告書.全国 LD 親の会
 - (6) マジカルトイボックス (2007) .障がいのある子の力を生かすスイッチ製作とおもちゃの改造入門.明治図書出版
 - (7) マジカルトイボックス (2005) .アイデア&ヒント 123—障がいの重い子の「わかる」「できる」みんなで「楽しめる」.エンパワメント研究所
 - (8) 中邑賢龍 (1998) .AAC 入門—拡大・代替コミュニケーションとは?.こころリソースブック出版会
 - (9) 千田耕基 (2006) .文部科学省委託研究 盲・聾・養護学校における特殊教育設備整備の在り方に関する調査研究 研究報告書.独立行政法人国立特殊教育総合研究所
 - (10) 大杉成喜 (2005) .特別支援教育のための「ちょいテク」支援グッズ 36.明治図書出版
 - (11) 中邑賢龍 (2007) .発達障害の子どもの「ユニークさ」を伸ばすテクノロジー.中央法規出版
 - (12) 坂井聡 (2009) .ケータイで障がいのある子とちょこっとコミュニケーション.学習研究社
 - (13) 藤澤和子・槇場政晴・岡田さゆり (2007) .あそんでつくってコミュニケーション!—PIC シンボルと JIS 絵記号を活用した特別支援教育のための教材集.エンパワメント研究所
 - (14) 朝野浩・成田滋 (2009) .新しい個別の指導計画 e - iep—保護者中心の支援の輪.ジヤース教育新社
 - (15) こころリソースブック編集会 (2000) .視点は始点.こころリソースブック出版会
 - (16) ATAC カンファレンス事務局 (2001) .ATAC カンファレンス 2002 テキスト〜.こころリソースブック出版会

- (17) ATAC カンファレンス事務局（2003）.ATAC カンファレンス 2003 資料集.ATAC カンファレンス事務局
- (18) ATAC カンファレンス事務局（2004）.ATAC2004 Proceedings ～気持ちを shift して見えたもの～.ATAC カンファレンス事務局
- (19) ATAC カンファレンス事務局（2005）.ATAC2005 ～電子情報支援技術(e-AT)とコミュニケーション (AAC)に関するカンファレンス～.ATAC カンファレンス事務局
- (20) ATAC カンファレンス事務局（2006）.ATAC2006 ～電子情報支援技術(e-AT)とコミュニケーション (AAC)に関するカンファレンス～.ATAC カンファレンス事務局
- (21) ATAC カンファレンス事務局（2007）.ATAC2007 Proceeding ～電子情報支援技術(e-AT)とコミュニケーション (AAC)に関するカンファレンス～.ATAC カンファレンス事務局
- (22) ATAC カンファレンス事務局（2008）.ATAC2008 ～電子情報支援技術(e-AT)とコミュニケーション (AAC)に関するカンファレンス～.ATAC カンファレンス事務局
- (23) ATAC カンファレンス事務局（2009）.ATAC2007 Proceeding ～電子情報支援技術(e-AT)とコミュニケーション (AAC)に関するカンファレンス～.ATAC カンファレンス事務局
- (24) 中央教育審議会（2008）.幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）.中央教育審議会
- (25) 文部科学省（2008）.特別支援学校学習指導要領.文部科学省

（了）